



京都の民主運動史を語る会機関紙 題字 住谷悦治

発行所

燎 原 社

〒603 京都市北区小山上総町

TEL (075) 432-4275

発行人

細 野 武 男

会費・誌代とも年3,000円



京・石峰寺の冬

小雪舞う 竹むらの下に 托鉢の

小さき僧らに 笑み返したり

え・うた

山下正子

農民運動散步記(八)

品角一郎
(遺稿)

この「農民運動散步記」は、故品角一郎氏(一九一〇—一九八一年)が、その最晩年に死に至るまで書きつづけられていたものである。

すぐれた画家であり、民主的な詩人でもあった品角氏は、一九四六年から約十年間農民運動に携わっていたことがある。日本農民組合京都府連合会の泉隆書記長のもとで、書記として京都府連の再建と発展のために活躍されたのである。この記録はその当時の思い出を書きつづられたものである。

品角氏がこの「散歩記」を書かれるようになったのは、一九七八年の夏に、当時私どもがやっていた京都府の農地改革史に関する研究会で、品角氏に敗戦直後の農民運動についての思い出を語って貰ったことがきっかけ

になっている(この研究会の成果は、京都府農地改革史編纂委員会編「京都府農地改革史」一九八〇年刊、にまとめられている)。本文にも書かれているような事情から、日農京都府連に関する資料が焼失してしまっていたために、関係者から当時の農民運動の状況についても聴き取りを行うことになったのである。

この中では、品角氏が農民運動にかかわるようになった事情や、丹後を中心とし府下全域に及ぶ農民運動の状況が、数多くのエピソードを交えながらビビッドに描かれている。

体験的農民運動史として、農地改革期(一九四五—五〇年)の農民運動を知る上で、貴重な資料となりうるであろう。

(立命館大学教授 大藪輝雄)
(九二・九・二〇稿—再録)

糸井一氏のこと

ところで、この岩滝からは民主陣営からは無視できない人物がもう一人出身している。それは糸井一氏である。糸井一氏は京大を出たあと満州に渡り大活躍のあと、戦後は、橋立中学や加悦の向陽第二中学の校長をやったあと、前に述べたとおり長壁民之助氏の力によって京教組の委員長、京都総評の議長などをやり、現在も京都子供を守る会の会長をはじめ民主団体の理事、幹事をつとめ、つねに民主戦線統一のために奮闘しておられるのである。

小巻敏雄氏のこと

岩滝は昔から保守勢力の強い機業地である。その保守的な町に革新的、革命的人物が、生まれていくわけである。ここでふれておきたいもう一人の人間がある。それは野田川町の出身者小巻敏雄氏である。彼は現在日本共産党の参議院議員の文教委員として活躍している。私が小巻君にはじめて出会ったのは、丹後地区委員会の事務所であった。その頃、氏は、

宮津高校の教諭をしていた。たしか高校では社会科を教えていたと記憶しているが、なかなか真面目な人柄であった。しかしなかなかの理論家であった。数年後、糸井一氏の還暦祝賀会が京都市内の丸太町河原町東入の教育会館であったとき、大阪教祖を代表して彼がアイサツした。その時、久し振りに大きく成長した小巻敏雄氏に何年振りに出会ったが、それからしばらくして彼が参議院議員選挙に党から立候補して、目出度く当選したことを知って、実にうれしく思ったことがある。

丹後と長壁民之助

考えてみると丹後というところはすばらしいところである。昔し流にいうと与謝郡から二名の国会議員、それも日本共産党の代議士が選出されているのである。実に愉快なことである。だがここで考えさせられるのは、宮津高校の教諭をしていた頃に直接政治的なことで指導していたのは長壁民之助氏であり、糸井一氏を京都の労働組合の総指導部におくりこんだのも、またこの長壁民之助氏であったことを考えると、実に長壁民之

助という人物は、人には目立たぬ陰で大きな力を発揮していたことにいまさら感心するのである。

朝妻の大江四郎氏

橋立の奥の伊根、朝妻にはじめてはいったのは一九四七(昭二二)年の秋頃だったと思う。私は伊根よりもさきに朝妻の村にはいった。この村には大江四郎氏が住んでいた。丸刈の頭で精悍な顔の青年であった。宮津の港で橋北丸という船に乗って伊根まで行くのである。伊根の岩ヶ鼻で下船してそこから朝妻までには峠を一つ越えていくのである。峠を越えると広々とした田圃が目にはいつてきた。はじめていった時、こんな山奥にこんな広い田圃があるのかとびっくりした。大江君の話では、矢張り、この村でも強制供出米の問題、それから税金の問題であった。後日、私が福知山を中心に税闘争をやっていた頃、この朝妻では大江四郎君等を中心に農民が税闘争をやった。またおなじ時期に伊根、加悦でも党支部、農民組合が中心になって税闘争を展開した。この朝妻へも河田賢治氏と一緒に座談会にいったことがある。そ

の時、なことがあった。伊根から朝妻への峠を歩いていったときのことである。谷の向の岩山に、松の太木がはえていた。それを見て河田さんは不屈の労働者の根性みたいだ、また、あの入道雲をみていると逞しい労働者の腕をみるような気がする、と語ったことがある。美術家の私にはできない発想であると思った。

本庄村の人びと

朝妻の隣村本庄村へは一九四九(昭二四)年の夏文化工作隊(十名)で行ったことがある。ここにはソ連からの帰還者の内匠源四郎君がいた。彼は静かな人柄で余り意見を述べずに、つねに行動するタイプの人であった。私たち工作隊がいった時は本庄によるこんで歓迎してくれた。またこの村の小学校に、宮津出身の三木八重子君が住んでいた。私たちはその晩、小学校で演説会を持ち松川、下山事件が政治的謀略であり、労働者弾圧の突破口をひらくための反動政府の陰謀であることを曝露した。聴衆は真剣な顔で私たちの話を聞いて呉れた。また広い講堂は一杯の聴衆で埋っていた。校長も

村長も演説会場にきてた。その上私たちが座談会のあと、学校の作法室でもかまわないから一泊させてくれとたのむと、村長が宿は準備してあるといって家まで私たちを案内してくれたが、実に大変な御世話になりその上、何日振りに風呂にはいり、鰻料理まで御馳走になったものである。

日ヶ谷村の演説会

私たち文化工作隊は、本庄村より筒川村、日ヶ谷村へと徒歩で工作にいったことがある。このことについては、この文章の最初の処で少しふれたことであるが、もう少し書いておくことにする。

私たちが日ヶ谷村にはいったのは、暑いひるさがりの頃であった。例によって、その晩は日ヶ谷小学校で演説会をひらく目的で、会場をかりに夏休みになっている学校へ行った。そこで、日直の先生と話したが、なかなか、先生は警戒して講堂を使はしてくれないので、困っていたところへモンペイをはいった老人がはいってきたが、その老人は先生に「なんだ」といって話しかけた。先生の話し振りは非常に丁寧な言葉づかいにか

わっていた。「こちらの共産党の人々が、今晚ここで演説会を開きたいから、会場をかししてくれと言われているのです」と一気にその老人に話してくれた。私たちは、その老人がどんな返事をするのかと不安であった。老人の返事は「かしてあげたらよいだろ」と一言先生に話してくれた。気になっていた会場はこれで確保でき、本当に助かった。老人は、私たちに「火の用心をしてください。それから、講堂は、埃だらけになっているから、キレイにして使ってください」と、いいのこして帰っていった。「あの方はどなたですか」と先生に訊ねると、「村長です」と返事がかえってきて、私はびっくりしたのである。

晝の工作をすませて、工作隊の人々が十名余り学校に戻ってきた。先生につれられて私たちは講堂へいったが、広い講堂は埃で真っ白であった。私たちはそれから全員で、広い講堂の大掃除をやり、雑巾で講堂をきれいにふき掃除したのである。会場は見違える程にきれいになった。これを見て、日直の先生も吃驚してくれた。その晩の演説会には、村長が一番早く会場に顔をみせてくれた。そうして会場が掃除されているのを見

て、感心してくれたのである。その村長は籠から、握りめしを出して「夕食のたしにしてくれ」といってカンパしてくれたし、その翌朝には、米と野菜やサツマ薯をもってきてくれた。そのうえ、たもとから「朝ぼったものだ」といってブドウの一ふさを私たちにくれたのである。私たち文化工作隊は全員そろって村長に頭をさげて「ありがとうございます」といったものである。

本庄村でも村長にいろいろと大変な御世話になったが、この日ヶ谷村でもまた村長に大変助けられたのである。

農民運動から離れて既に二〇年余りもたったが、いまでもときどきこのときのことを思い出し、胸が熱くなることがある。

この日ヶ谷村での演説会のあとの座談会で、ソ連からの帰還兵が一名入党してくれた。私たち文化工作隊は、翌朝、野間村に向ってさき書いたように、大鼓山を原生林で道に迷いながら突破して、夕方には野間村にたどりついたのである。

伊根の人びと

ところで伊根村のことについて

書くと、朝妻、本庄へはその後もよくでかけたが、いつも船で降りてすぐ目的地の朝妻、本庄へと足をむけたものだから、余り深い印象が残っていないのが残念である。私が橋立方面にはいる前日、伊根でよく一泊させていただいた同志の家が朝妻へ行く道の途中にあった。いまその家の名前が思い出せないのが残念である。

その頃、伊根には民主化運動で戦後ただちに社会科学研究会等をもって活動されていた土井即融氏が住んでおられることは知っていたが、その当時お会いしたことがなかった。後日、京都文化人交流会と宮津の文化人とうが上宮津の盛林寺に集って、丹後資料館の建設問題を中心に意見の交流をやった際、はじめてこの土井即融氏にお目にかかったことがあるが、宗教家としては実にめずらしい巾広い文化性を身につけた人柄である。また伊根にはその当時、表面的な活動をしていなかった人のなかに、和久田幹夫氏をはじめ有能な活動家が五、六名住んでおったことを知っているが、その人々には私の方から意識的に会わずにすごしていた。

(以下次号)

長壁さんのこと

(一)

私は長壁民之助さんと初めて会ったのは一九三三年、高松刑務所でした。私の監房のはす向いのかん房でした。したがって話しあう機会がなく朝の点検のとき房からのぞいて顔をみるくらいでした。二年ちかくつづきました。さいしょから不審に思ったのは彼はただ一人、赤い獄衣だったのです。他のみんなは青い獄衣を着ていました。私も赤い獄衣を着せられました。一しょに入った同志は青い獄衣でした。それでこれは転向、非転向を獄衣にまで及ぼしていると気づいたのです。そのこの獄中生活で転向、非転向に差別が行なわれていることを知ったのです。獄中での日曜、祭日には、みんなが娯楽や講話に一しょに集まる機会を与えられているのに、非転向者は一切かん房から出しませんでした。

そのご大阪から送られてきた同志も赤い獄衣を着せられてい

古森 茂

た。

一九三三年、佐野・鍋山の転向声明、かれらもついに天皇制に屈服した。共産党首脳はこの裏切りは党内外に大きな衝撃を与え転向時代を画した。だが長壁は動じなかった。依然として赤い獄衣をまとして。

もう一つ私にとって同郷の長尾有が高松刑務所にいることを知っていたので会えると思っていたら一九三三年三月出所(満期出獄)していた。もう一人、近内金光(私の選挙区候補)も病棟にいたので会えなかった。

(二)

戦後私が神戸大倉山の仮設住宅に居た頃(一九四六年)長壁さんが訪ねてくれたが、当時私は兵庫の広い農村を走りまわっていて会えなかった。一九七六年、彼の死を知った。一度会いたかったのに残念。

前九二号(九三・一二・二〇発行)で、細川 立政権批判の声を、お寄せ下さいとお願いましたところ、六氏より原稿をいただきました。今年に入って細川政権は、コメ輸入自由化、小選挙区制の導入など、自民党と結びながら、悪政を続行してきました。そして今、さらに消費税増税の方向をさがしています。

この原稿をいただいた時から情勢は急速に動いてきました。しかしそれぞれのご意見は、今日の時代、どこに真実を求め、どこに国民の願いがあるかを、するどく表明されています。大変貴重なものであります。お名前の五十音順に掲載させていただきます。(九四・二・八)

稲田 達 夫

「過去を現代に生かし未来を開く」。これは京都の民主運動史を語る会の目ざすところである。戦前、細川首相の祖父に当る近衛文麿が新体制運動を始め、大政翼賛会の結成されたときの選挙の演説会を聞きにいった記憶がよみがえってくる。弁士の中には大政翼賛会推せんと非推せんとがあり、政権批判すれば、舞台のソデにいる警察官が弁士注意と叫ぶ。続いて弁士中止、非推せんでは水谷長三郎と田中伊三次の二人で拍手が最も多くその二人は当選。当時としては最大の府民の抵抗であった。歴代の首相で前任者の責任と云わなかったのは初代の伊藤博文だけというが、不思議と細川政権は自

民政政権の批判をひかえている。それだけでも第二自民党、保守二党の名に値すると思う。私の体験からすれば、保守は常に革新の分断をはかり、最後は共産党の存在を否定する傾向を示して来た。しかしこれは民主主義にも社会の発展法則にも反していると思う。連合政権といっても政権発足後、一度も大会を開かなかったり、大会決定が執行部一任で曲げられたり、特定の団体が見えて政党が見えなかったり、さががけよりぬけがけが目立ったり、およそ民主主義の政党とはほど遠い。結局、大名が將軍になり將軍が大名になっただけで武家政治にかわりはない。野合というより批判を許さな

い反動への道へと道を(こととなる。戦後五十年、憲法を暮らしの中に生かす大衆の団結に期待し

最も危険な首相

木村 万 平

細川内閣という第二自民党内閣が誕生して僅か半年、その正体はきわめて鮮明になった。ともかく、今まで自民党がやろうとして出来なかった悪政を次から次へと国民に押し付けてくる内閣である。この点あの戦時中に出現した近衛内閣と瓜二つと言えるのではないかと思う。近衛首相は当時の貴族出身という貴公子然としたソフトな風貌で国民の人気を集めたが、やった事といえば日本を破滅に導いたことだけだった。細川首相も熊本藩主の流れを汲み、近衛首相とも姻戚関係を持ち、同じように貴公子然としたソフトな風貌で国民の人気を集める一方、出してくる政策はことごとくアメリカや大企業のために国民を犠牲にしてはばからない政策であるように。

たい。反共は改憲の声である。

細川首相の人氣はたとえ内閣が崩壊しても近衛首相と同じようになかなか衰えないと思う。時代劇の「水戸黄門」や「暴れん坊將軍」が人氣があるように、多くの日本人の中に貴族やお殿様・お姫様・王子様など家柄に対する憧れと郷愁の念が強いこと、お上意識が未だに強いことなどが大きな原因であろう。人々はどんな悪いことをしてもこうした人物の悪業を許してしまうものだ。昭和天皇の戦争責任問題と同一である。だからこそ細川首相というのはもっとも危険な首相であり、戦後最悪の首相、日本を破滅に導く首相と言える。近衛首相の時のように第二次・第三次の内閣を決して作らせぬことが大切だろう。

細川政権とその幻想

品角小文(85才)

新年お目出度うございます。
と、申し上げたいのですが、どこを捜しても、住民を取り巻く状況に、目出度いことは、何一つ見当たりません。

米問題にしても、医療対策にしても、私達住民にとっては、不安と、とまどいを感じさせる事が多すぎます。

細川総理は政策として、不況対策、行政改革、政治改革を打ち出していますが、そのいずれもが難問なのに、まるで手もつけられていません。こうした国民に重要な問題を空転させたまま、社公民

を手なづけて衆議院で可決させ、参議院に送付したのですが、うまくいかず、そのうえネコン汚職の摘発など不正構造があらわになり、国民もまた金権腐敗政治に腹立ちを持ってきました。日々の暮らしの上で国民は困難と苦勞が増す細川政権に見切りをつけています。

細川氏もまた衆議院で通っている議案を、参議院が通さないのなら解散だときめつけてきました。自民党政治を継承する細川政治に、シラケと怒りに怒りを感じています

近衛・細川の「大政翼賛」運動

藤谷俊雄

戦前・戦中のファシオ的な統制政策を支配階級が行った中で、日本が中国侵略からさらに東南アジ

ア諸国に戦争をひろげてゆくために、大多数の国民の反対を押えて行く。として、貴族階級の出身

で「平民的」知識人である近衛文麿公爵を引張り出して首相とし、彼の人柄と国民の善意を利用して、とくに文化人や知識人の組織を動員、「大政翼賛会」という日本のファシオ的組織を作り上げた。文化人には自由な創作活動をゆるし、経済生活の保証も与えるように思わせた。多くの知識人・文化人で日本の将来を心配し、戦争に反対する人びとの多くが、近衛の言うことを信頼して支持し、大政翼賛会の下部組織に入り中国や南方の占領地や戦地に出かけて、戦争政策に命がけで協力した。一方近衛は侵略戦争が破綻すると政権を投げ出して、隠退してしまった。

藤尾は一九〇二年東京で出生、一九九年京都絵専(現、芸大)入学(中退)、三〇年渡仏、洋画を学ぶ。三八年新制作派展出品。四三年中国大連に渡り、苦力をモデルに「夜明け前(働く人々)」を描く。新制作派展に出品、「反戦的」であるとして拒否される。朝日大東亜戦争展に出品。四四年中国河南作戦に現地召集。陸軍美術展出品。四七年技術は小磯良平画伯と並ぶといわれたが対立して新制作派脱退。五〇年日本帰国。戦後日本の民主民族戦線を支持、人民戦線団体のデモなどを描いた。七八年パリに移住、絵画や彫刻の創作に再起したが八六年死去した。九三年十一月・九四年二月東京で展示会開催(「芸術新潮」九・一号)。

細川連立政権の二面性

山口正之

細川政権は、一方では、長きにわたる自民党一党支配体制の崩壊過程の表現である。この側面への国民の期待、すなわち、この政権

が真に国民本意の民主連合政権の生誕の幕開けになるだろうという国民の切実な期待が、前例のない高い支持率の内容となっている。

しかし、他方では、細川政権は、自民党にとって代わる保守支配の新しい形態の模索でもある。

一九五五年以来の自民党支配は、リクルート汚職、佐川急便汚職など相次ぐ金権腐敗体質の暴露に対する国民の怒りによって掘り崩されてきた。そこで、国民の信頼を失った自民党一党支配体制をもつとスマートな保守支配の新しいやり方と取り替える必要が出てきた。その過渡形態が細川政権である。

この新しいやり方の効果を軽視できないことは明らかである。コメの輸入自由化決定などもさることながら、何よりも、野党第一党

の社、を与党第一党に取り込んでしまった「功績」は大きい。おかげでぐらついてた保守支配を支える翼賛体制が出来上がってきたほどこだ。

しかし、七党一会派の寄り合い世帯のはらむ矛盾は、結局のところは、この政権の本質的な二面性に起因し、今後激化することは避けられない。強大な国民運動の展開によって、細川政権の限界を乗り越えて、真に民主的な政治改革、行政改革、経済改革に向かってのさらなる前進を切り開くべきときである。

『どう猛な野獣か！』

細川内閣』

蓮 佛 亨

こんなに強引に政治を進める内閣は、戦前の内閣しか見た覚えがない。

政治改革法特別委員会でも、やっとならば可決し、本会議で否決された。

つまり政治改革法案の内容、道

理に問題があることの証である。それを無理矢理通そうというのは、近衛内閣の首班であった祖父も顔負けしているのではあるまいか。

連立与党は、顔は細川、頭と胴体は小沢、胴体の下部は市川、手

足が山花、等々のギリ。神話まがいの奇妙な怪物動物だから、強引に進めなければ、体全体の意志統一が計れぬようである。いずれにしても無茶苦茶である。

ゼネコン疑惑が、これほど摘発され具体的な逮捕などと明らかにされたことは史上、初めてである。小さな営業部担当幹部の逮捕程度で、しつぽ切りで終わってきただ。私は、建設業界の事には大いに関わりがあるから、相当なところまで知っていたが、今までは声を大きくして叫んでも、問題にしていられなかった。今は一つ一つが明らかにされ、問題化されるのである。

市会議員よりも県・府会議員、県・府会議員よりも国会議員と有利な立場を利用して、どれほど建設分野に首をつっこんでいのか計り知れない。下から上まで同じ体質（たかりの）の議員のピラミッド型の形態によって、連立与党と自民党が構成されている。みな脛に傷持つ身、汚れた身である。

これ程の疑惑が発生すれば、政府・内閣は国民の先頭に立って疑惑解明に乗り出すのが本来の有様である。細川総理、これを後ろたててる新生党代表幹事小沢は自らが

疑惑の影の内に居るのであるから、自らが自らを裁くことになる。内閣を替えなければ、真の裁きが出来ない。内閣が変わっても、同じ類・族の人が出てくるならば、手間が掛っても国民が裁かねばならぬ。

政府とゼネコンとの癒着は、江戸末期以来、日本資本主義形成の歴史と一致する。初めてマスコミが紙上に載せたのは当たり前のことであるが、大事な歴史上の一頁であり、国民世論の勝利、民主勢力前進の賜物である。

貴重な国民の金、公共工事費という建設費を地下水のように組み上げるゼネコンと、それと組み助ける、官僚+政界の三体の悪い関係を解体し、国民に役立つゼネコン+官+政を民主的に規制していく闘いをしなければならぬ。そんな抱負をもって新年を迎えた。おめでとう。

(一九九四・一・二五 記)



ツバキ

編集部にいただきました年賀状の一部を、誌友の皆さんの消息交流の一助として、紹介させていただきます。

○ご健闘感謝します。本日(三〇日)

燎原入手・誌上での品角君、長壁氏とは共に深い関係があります。長壁氏とは高松刑務所で一緒でした。あの佐野、鍋山の転向いらい転向時代をかくしたが、長壁は非転向でがんばりとおしました。戦後まもなく私宅へ来てくれましたが、私は農村へいって会えませんでした。品角君と戦後、彼が党府委の農民部長であった頃、私は兵庫の農民部長、その後党関西地方協議会の農民部責任者として、彼や奥田君とよく会っていました。(誌代送る振替用紙送って下さい)

私も病のため四年有余入退院をくりかえし七月退院回復に向かっています。

古森 茂

○老齡すすみ毎日が踴躍としていますが、気力は滄浪、波、青々としています。
府知事選、木村万平氏勝利、万代の平和を。

秋田清二郎

○昨年は内外とも激動のつづいた年でした。今年も大事なたたかいが相つぎます。

わが国が民族の完全独立と中立をかちとるため日米安保条約の廃棄、平和、民主主義、人民の生活向上に向かって前進するよう努めましよう。貴方と御家族の健康と繁栄を祈念します。

安井 真造

○絵は野辺にさく若草です。左記入院加療中、山科区御陵大津畑町、小沢病院

福森かずへ

○此花博愛会を退職致しました。在職中のご厚誼に対し心からお礼を申し上げます。今後とも宜しく願います。

潮田 峰治

○心に刻むわが思いとかナントカ、ボク七十七才。今の心境を印石に彫った。あそび気分。漢字ばなれに今は、読んでくれそうにもありませんが、お気が向いたら是非。ま、今年、御無事で。

山本 浩治



山本浩治
印

○おかわりございませんか。国会に送っていただいては、一年五カ月。みなさんのご協力をえて、質問は二十二回、「看護婦の増員とお礼奉公」「保育所」「骨粗しょう症」問題などを取り上げ、「障害者基本法」を制定できたことは、なにより喜びです。

自民党政権の悪政にさらに、輪をかけた細川連立政権の「オコメの輸入自由化」に続いて「小選挙区制の導入」「年金」「病院給食」など福祉切り捨ての攻撃は目白押し。そのうえ、消費税まであげようとしています。京都の革新の代表として、この悪政に唯一対決できることは私の誇りです。

知事選勝利、来年の参議院選勝利へ。一九九四年こそ革新上げ潮の年に。みなさんとともに、いのち輝かせてがんばります。

家族色 地球を染めよ 家族年
西山とき子

領収書にかえて

91号につづいて、この号では、93・7・94・1に受領させていただいた方々のお名前を掲載させていただきます。厚く御礼を申し上げます。

「燎原」事務局

片方 信也 伏見区
柴田 好人 山科区
豊岡 栄一 南区
中沢 武雄 船井郡八木町
佐藤 昭夫 宇治市
小林 幸男 右京区
田中 豊蔵 南区
東 理代吉 竹野郡丹波町
袴田 浩園 北区
村島 昭男 千葉県松戸市
福森かずへ 左京区
宮城日出年 宇治市
真柄 征市 右京区
古森 茂 神戸市長田区
杉之原寿一 左京区
酒谷 義郎 東山区
大友 春子 福島県猪苗代町
佐渡 一郎 舞鶴市
日野原一彦 船井郡丹波町
川越 俊夫 長岡京市
清水喜代司 城陽市

会や本誌については、編集部担当の奥田修三(宇治市広野町寺山17-257、〇七七四・四三・一三四七)、湯浅貞夫(京都府船井郡日吉町保野田、〇七七・七・二・〇一四六)の両名のいずれかにご連絡下さい。